# 「Asakusaé——浅草へ」

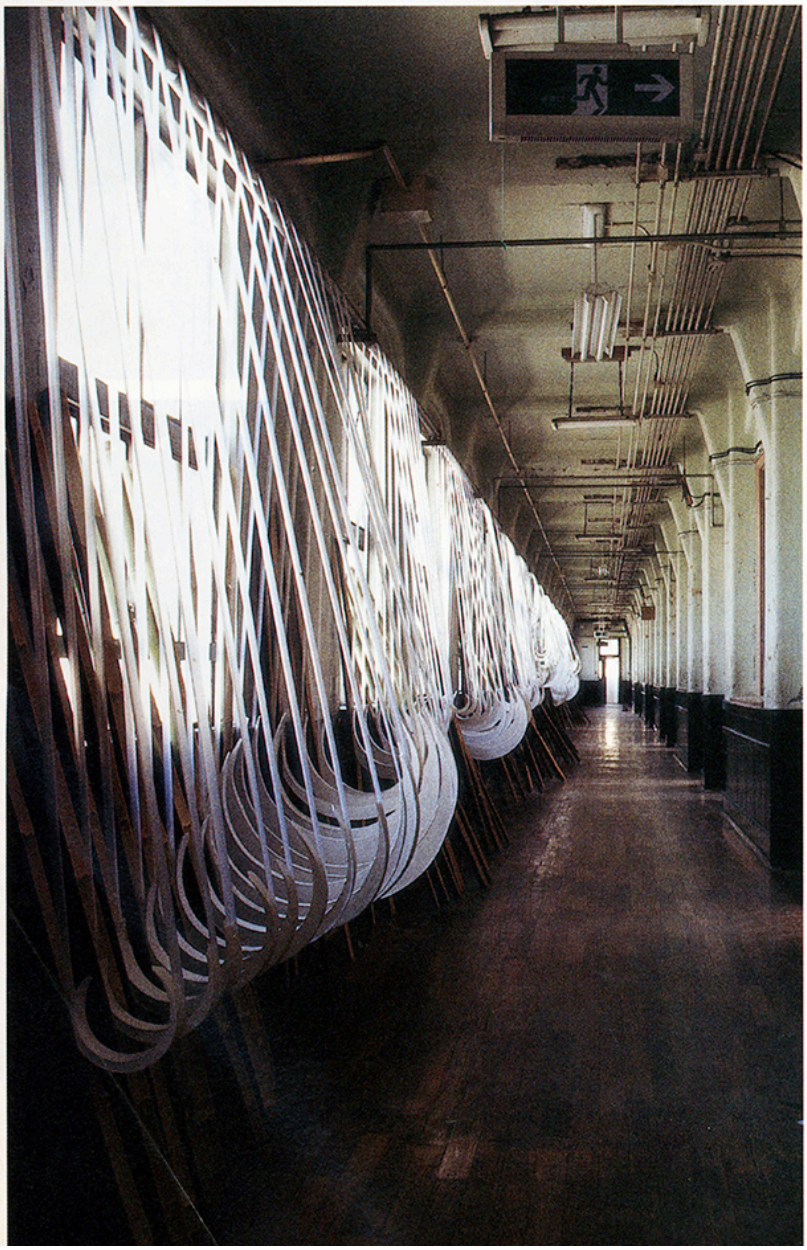
日本ベルギー現代美術交流展

横山勝彦
Katsuhiko Yokoyama

「書を捨てて町へ出よう」という言葉があった。寺山修司の映画。一九七一年のタイトルに使われたこの言葉は当時の若者たちに、鮮烈なイメージを提供したに違いない。寺山の意図とは無関係に、この呼びかけは、高度な経済成長にすべての価値を固定しようとしていた社会の中で圧迫された若者たちにとって、ある解放感を与えるとともに、大いなる励ましともなっただろう。またそれは、アングラとか、カウンターカルチャーとか、反体制とか、愛と自由とか、そんな言葉が、まだ意味を持っていた時代、あるいはそんなことを信じようとした時代のメッセージの一つとして、当時の若者たちの共通の感性を的確に表現したものでもあった。書物のなかに埋もれて、自分だけの世界のなかに閉じこもっていないで、町の現実のなかに、さまざまな人人の織り成す現実のなかに自分の皮膚を直接晒すこと。見単純な青春映画のセリフのようなこの呼びかけは、しかし、危険と未知のものに直接接していくことを若者が忘れようとしていた事への警鐘でもあっただろう。自意識のなかに閉じこもり、他者と触れ合うことを拒否し、日本人総オタク化現象を指摘される現在を、一九八三年に死んだ寺山は、すでに二十年前に予見していたのだ。

浅草の旧金竜小学校校舎で開催された「日本ベルギー現代美術交流展——浅草へ」の会場を歩きながら、寺山修司のことを思い出した。演劇実験室「天井桟敷」を主催し、前衛芸術のさまざまな分野で精力的に活動した寺山の根底には、早熟な歌人としての繊細な感受性がある。すでに廃校となった小学校の校舎のなかに入ると、突然自分が子供時代に戻ったような、奇妙な感覚に捕えられたが、この感覚を歌人寺山修司はどのように歌うだろうか。

●写真下—モニカ&ベルナール　ユボ「無題」　●左上—カテリ　ヌ　ワルモ
月に送った物理学の　トはどうなるのか　●右上　3月31日の公開制作の様子



現在のなかに過去が割り込み　過去の自分と現在の自分が果てしない対話を続けているような、このような感覚を呼び起こす場所として、旧金竜小学校校舎は、それ自体が強い記憶の磁場となっている。このような濃密な時間に満ちた場所を会場として、現代美術展が開催された。日本とベルギーの作家たち二十数名は、この小学校で制作し作品を展示し、シンポジウムやレクチャーの機会をもったのだ。ほぼ　カ月にわたって、彼らはこの小学校に関わったことになる。展示される現地で制作することは、当然のことながら、その会場の影響を受ける。しかも今回はあらかしめ展示用に設定された、中性的な空間ではなく、日常的ではありながら、過去に満ちた特異な空間である。

結果として、作品の多くは過去へのノスタルジックな感情に満ちている。それは作家のほとんどが三十歳代ということにもよるのだろう。老人でもなく子供でもない。まさに中途半端な大人として、彼らは、自らの子供時代と直面しただろう。そして、それは決して帰ることの出来ない過去であり、現在という日常性のなかで忘れ去ってしまった、誰にも変えることの出来ない自分だけの子供時代だったはずだ。現代という果てしなく、かりそめの欲望に誰もが駆り立てられている時代において、時間が凝縮した過去といやおうなく向き合ってしまう小学校の旧校舎で開催されたこの展覧会は、主催者の意図を越えて画期的であった。なぜなら芸術的な行為とは、人類に共通した子供時代に根拠を置く人間の営みであるからにほかならない。それは　例えばやっとたどり着いた山頂で感じる何物にも替えがたい爽やかさに似て、自分の肉体と精神が積極的に関わった後やっと自覚できるような、私と私たち自身が主体的に経験するものである。文化的な価値は、他者によって与えられるものではない。それは自らが発見し実現していくものだ。会場で偶然出会った中年の男性が、「なんか寂しいね」とつぶやいていたが、この寂しさを身に引き受けることからしか始まらないのだ。書を捨てて、町に出よう。自分の内面への旅は、町で他者と出会うことからしか始まらないのだから。

（よこやま　かつひこ／美術批評）